

後宇多院関係史料・研究文献目録稿（上）

坂口太郎編

序

本目録は、後宇多院（文永4年〔1267〕～元亨4年〔1324〕。以下、後宇多と略す）に関わる公刊史料・研究文献の内容別目録である。まず、後宇多院の事蹟について述べておきたい。

後宇多は、鎌倉時代後期の治天の君として公家政権を領導した人物である。後宇多の祖父である後嵯峨院、また父の亀山院は、公家政権の諸制度を刷新し、とりわけ訴訟制度の整備に積極的に取り組んだことで知られるが、後宇多は父祖の政治改革の成果を受け継ぎ、吉田定房・万里小路宣房・六条有房らに代表される、才学に秀でた中流公家層を率いて、公家徳政の流れをより一層推し進めた。後宇多の院政は、やがて到来する後醍醐天皇の建武政権の前提をなすものとして、歴史的に重要な意味を持つ。また、鎌倉後期は、皇統が持明院統・大覚寺統の二つに分立し、両統の政治的対立が次第に深まった時代であったが、後宇多は大覚寺統の家長として持明院統・鎌倉幕府と相對し、その敏腕なる政治力を發揮して自己の皇統の権威と権力を保持した。鎌倉後期の政治史を論ずる上で、後宇多の存在を逸することはできない。

さらに、後宇多は仏教史においても大きな足跡を残した。院政期以来、王権と仏教が密接な関係を結んだことは知られているが、鎌倉後期に入ると、即位灌頂の定着に象徴されるように、院・天皇は密教に著しい傾倒を見せるようになる。かかる時代状況のもと、後宇多は幼少より多くの護持僧に親しみ、俗人でありながら密法を伝受した。やがて出家を遂げた後宇多は、真言密教の小野・広沢両流を受法するとともに、新たな宗教権門たる大覚寺門跡を創り上げ、さらには東寺・高野山・神護寺などの真言寺院の復興、真言教学の刷新にも力を注ぐことになる。真言密教の掌握を企図した後宇多の宗教構想は、大覚寺統の王権を護持する政治戦略と表裏をなすものであり、後宇多はいわば中世における政治・仏教の交錯を一身に體現した人物として位置付けうる。

鎌倉後期の文化史に目を転ずると、ここにも後宇多の重要性を見て取ることがで

きる。例えば、伝統的な歌風の中心にあった二条為世を重用したことは、新奇性に富んだ歌風で知られる京極為兼を信任した持明院統の伏見院と好対照をなすものであり、鎌倉後期の歌壇史の展開上、後宇多が一つの核であったことは疑いない。さらに、少壮より漢籍に親しみ、当時一般に忌避された『周易』を積極的に取り上げて独自の説をなしたことは時流を抜く行為として興味がひかれるところであり、また弘法大師空海を追慕して大師様の名筆を多く残したことは日本書道史に重要な一画を占めるものといえよう (1)。

このように、後宇多は鎌倉後期の政治・仏教・文化の展開に深く関与した人物であり、同時期の時代相を顧みる上で、その事蹟は大いに注目すべきものがある。編者の専攻は、鎌倉・南北朝時代の政治史・仏教史であるが、近年とくに後宇多に関心を抱き、その研究を進める上で、明治以来の各学問分野における研究の軌跡をたどる必要を痛感した。これが本目録編纂の動機である。

さきに編者は、芳澤元氏とともに「花園天皇関係史料・研究文献目録稿」(2)を発表し、後宇多と同時代の花園天皇に関する研究文献約 600 件を収載した。これは「持明院統研究文献目録」の性格を併せ持つ目録であった。これに対して本目録は「大覚寺統研究文献目録」といべきものであり、両目録を併用することで、鎌倉後期の公家政権・宮廷をめぐる研究状況を大まかに一望することができよう。とくに、重要な学術的成果をあげながらも、現在の研究者に振り返られることの少ない戦前の研究文献(3)にも注意を払った点は、本目録の一つの特色ではないかと思う。本目録が鎌倉後期に関心を抱く人に些かでも裨益するところがあれば、編者にとって望外の喜びである。

もっとも、この種の目録は完璧を期しがたいものであり、本目録もまた不十分さが拭いきれぬ部分もあろう（とくに、和歌・荘園の項目などはその恐れを強く感じる）。錯謬・脱漏に気付かれた方には、ご教示を切にお願いする次第である。

なお、本目録は紙数の都合から、上下二篇に分けて掲載される。

注

- (1) 以上の後宇多の事蹟については、ことごとく本目録に収載した研究の成果に負うが、後宇多が『周易』について独自の説を行ったという記述は、編者が新たに見出した『後深心院閑白記（愚管記）』永和4年（1378）4月10日条による。すなわち、同記には、
良賢来。召。前。先日可。持。来易正義之由、仰。之。仍来也。（中略）今日持。来易第

一秘本。頼業以来相伝本也。後醍醐院被_レ下_二秘説^{是後宇多院御説云々}。於頼元_一之時、被_レ下_二宸翰_一奥書。(下略)

とあり、南北朝期の紀伝儒である清原良賢が所持した『周易』の写本に後醍醐天皇自筆の奥書が見え、この奥書は後醍醐が後宇多の『周易』に関する「御説」を清原頼元に授けたさいに加えられたものという。後宇多の『周易』に対する造詣の深さを示唆するとともに、後醍醐が後宇多の説を熟知していたという新たな史実が浮かび上がる。なお、大覚寺統・南朝における『周易』の受容とその意義については、本目録 G.学問・文庫に示した、太田晶二郎「北畠親房卿及び南朝の漢学に関する断章」(1954年11月)を見られたい。

- (2) 『花園大学国際禅学研究所論叢』第2号、2007年3月。
- (3) たとえば、本目録 D.政治に示した赤松俊秀「京極准後に就いて」(1932年12月)は、後宇多の養育者である京極准后平棟子(後嵯峨院妃、宗尊親王生母)を取り上げた論考であるが、近年の菊地大樹「宗尊親王の王孫と大覚寺統の諸段階」(2001年3月)を先取りする内容を持つとともに、両統迭立の発生についても刮目すべき指摘を行っている。また、本目録 E.仏教に示した猪熊信男「後宇多天皇の御信仰に就て」(1925年4月)は、平雅行「青蓮院の門跡相論と鎌倉幕府」(2004年6月)が指摘した後宇多と青蓮院道玄・慈道法親王の関係について既に言及している。いずれも戦前の研究が侮れない水準を持つことを示す好例である。

例 言

- 本目録は、明治時代より2011年までに発表された後宇多院に関係する公刊史料、研究文献を集成したものである。文献は内容別に分類し、各項目において発表の編年順に配列した。内容が多岐にわたる文献には、便宜的に分類したものもある。復刻・復刊・再収録などについては→記号で示した。
- 各項目の収載内容・基準は以下の通りである(A～Gは上、H～Nは下に収録)。
- A. 史料・著作には、後宇多に関する基本的な史料集、後宇多の著作の複製・影印・図録・解題、『後宇多天皇日記(後宇多院宸記)』『御手印遺告』に関する論著、『大覚寺聖教・文書』の目録・翻刻・調査報告などを挙げた。
- B. 伝記には、後宇多の伝記・年譜、各分野の辞典項目、諱に関する研究などを

挙げた。ただし、辞典の項目については、原則として記名執筆のものに限った。

- C. 手跡には、後宇多の書風や消息に関する文献を挙げた。
- D. 政治には、鎌倉後期（特に後宇多即位以後）についての通史・総論を始め、同時期の治天の君・政治過程・公武関係、また公家訴訟制度・新制・徳政、貴族社会を論じた研究などを挙げた。原則として後宇多に関わる研究を収めたが、それ以外の重要な研究を含めた場合もある。ただし、下級官人や諸官司、六波羅探題などの研究については原則として除いた。
- E. 仏教には、後宇多の仏教信仰全体の概説を始め、後宇多の密教興隆、弘法大師信仰、密教受法、即位灌頂、真言教学振興に関する研究、後宇多と真言諸寺院の関係に触れた研究などを挙げた。また、本覚大師号相論や、後宇多と天台、禅、律、神祇の関係について触れた研究も収めた。
- F. 和歌・文学には、鎌倉後期の歌壇史に関する包括的な研究を始め、後宇多治世下における勅撰集編纂や、後宇多主催の歌会・百首歌に関する研究、二条派歌人の主要な伝記研究、私撰集の研究などを挙げた。また、後宇多の連歌、『増鏡』における後宇多の位置づけについて論じた研究も収めた。
- G. 学問・文庫には、後宇多の学問教養に触れた研究を始め、後宇多の漢学教養、大覚寺統の管領した文庫・宝蔵に関する研究を挙げた。
- H. 芸能には、後宇多の音楽・蹴鞠に関する研究を挙げた。
- I. 肖像には、後宇多の肖像に関する研究を挙げた。
- J. 住宅・都市には、後宇多の居住した里内裏・院御所やその空間構造、大覚寺統の拠点である権門都市嵯峨・亀山殿に関する研究を挙げた。ただし、発掘調査については除いた。
- K. 家族には、後宇多の父親である亀山天皇、后妃の遊義門院、皇子女の後二条天皇・後醍醐天皇・達智門院に関する研究などを挙げた。ただし、後醍醐天皇については主要なものに限り、建武政権に関する研究はほとんど除いた。また、後宇多の皇孫である邦良親王・邦省親王・聖尊法親王や、大覚寺統に属する恒明親王・守良親王に関する研究、大覚寺統における追善仏事・葬送を論じた研究も収めた。
- L. 知行国・荘園には、大覚寺統の知行国および大覚寺統による知行国主補任に関する研究、大覚寺統が所有した八条院領・室町院領・七条院領などの伝領研究、鎌倉後期の貴族社会と荘園制に関する研究、大覚寺統の個別荘園の沿

革に関する研究などを挙げた。ただし、網野善彦ほか編『講座日本荘園史』第5巻～第10巻（吉川弘文館、1990年5月～2005年2月）に収められた各荘園の解説については除いた。また、個別荘園の研究については、荘園と大覚寺統の関係に言及したものに限った。

M. 側近には、後宇多を支えた吉田定房・万里小路宣房・六条有房ら廷臣や女房、また後宇多に関係の深い禅助・道順・我宝・道我・栄海ら真言僧に関する研究を挙げた。

N. 陵墓には、後宇多の陵墓に関する文献・調査報告などを挙げた。

A. 史料・著作

I. 史料集

列聖全集編纂会編『列聖全集』御製集 第2巻「後宇多天皇御製」「後宇多天皇 嘉元仙洞御首首」（列聖全集編纂会、1915年7月→改題復刻版『皇室文学大系』第2輯、名著普及会、1979年7月）

列聖全集編纂会編『列聖全集』御撰集 第1巻「御連歌集 後宇多天皇御連歌并御発句」（列聖全集編纂会、1915年9月→改題復刻版『皇室文学大系』第1輯、名著普及会、1979年7月）

列聖全集編纂会（和田英松）編『列聖全集』宸記集 上巻 御記纂「後宇多院御記」（列聖全集編纂会、1917年2月→改題復刻版『皇室文学大系』第4輯、名著普及会、1979年7月）→増補「史料大成」刊行会編『増補 史料大成』第1巻 歴代宸記「後宇多院御記」（臨川書店、1965年9月）

列聖全集編纂会編『列聖全集』御撰集 第6巻「宸翰集 後宇多天皇 密教御信仰に關して賜へる宸翰」「後宇多院御遺告」（列聖全集編纂会、1917年6月→改題復刻版『皇室文学大系』第1輯、名著普及会、1979年7月）

赤松俊秀「大覚寺」（京都府編『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第18冊、1938年3月→臨川書店、1983年9月）→「大覚寺蔵 後宇多天皇・伏見天皇・花園天皇宸翰」（同氏『京都寺史考』仏教史学研究双書、法蔵館、1972年9月）

辻善之助監修、森末義彰・岡山泰四編『歴代詔勅集』「後宇多天皇」（目黒書店、1938年11月）

- 辻善之助『聖徳余光』「後宇多天皇」（紀元二千六百年奉祝会、1940年11月→復刻版、『近代未刊史料叢書2 紀元二千六百年祝典記録』第25巻 聖徳余光・列聖珠藻、ゆまに書房、2002年11月）
- 佐々木信綱『列聖珠藻』「後宇多天皇」（紀元二千六百年奉祝会、1940年11月→復刻版、『近代未刊史料叢書2 紀元二千六百年祝典記録』第25巻 聖徳余光・列聖珠藻、ゆまに書房、2002年11月）
- 帝国学士院編『宸翰英華』乾・第1冊「後宇多天皇」（紀元二千六百年奉祝会、1944年12月→復刻版、思文閣出版、1988年10月）
- 宮内庁書陵部編『皇室制度史料』太上天皇1～3（吉川弘文館、1978年3月～1980年3月）
- 村田正志『村田正志著作集』第7巻 風塵録（思文閣出版、1986年8月）
- 藤井謙治・吉岡眞之監修『天皇皇族実録』第66巻 後宇多天皇実録（ゆまに書房、2009年3月）

II. 複製・影印

- 国書刊行会『灌頂記』（国書刊行会、1903年11月）
- 大覚寺編『後宇多法皇御宸翰 弘法大師小伝』（大覚寺、1914年12月）
- 列聖全集編纂会編『列聖全集』宸筆集「後宇多天皇宸翰御消息」（列聖全集編纂会、1917年6月）
- 大覚寺編『国宝 後宇多天皇宸翰 御手印遺告』（大本山大覚寺、1972年1月）
- 東京大学史料編纂所編『花押かがみ』第4巻 鎌倉時代3 「2857 後宇多天皇」（吉川弘文館、1985年3月）

III. 図録

- 是澤恭三編『墨美』第124号 後宇多天皇（墨美社、1963年1月）
- 京都国立博物館編『嵯峨天皇 1150年遠忌 嵯峨御所 大覚寺の名宝』（日本経済新聞社、1992年4月）
- 大本山大覚寺・学校法人大覚寺学園・京都嵯峨芸術大学編『後宇多法皇御入山 700年記念 大覚寺の名宝』（大本山大覚寺・学校法人大覚寺学園・京都嵯峨芸術大学、2007年8月）

IV. 解題

列聖全集編纂会（和田英松）編『列聖全集』皇室御撰解題「後宇多天皇」（列聖全集編纂会、1917年6月→改題復刻版『皇室文学大系』第4輯、名著普及会、1979年7月）

和田英松「後宇多天皇」（同氏『皇室御撰之研究』明治書院、1933年4月→復刻版、国書逸文研究会、1986年7月）

V. 『後宇多天皇日記（後宇多院宸記）』

和田英松「御歴代の御日記に就いて」（『日本文学講座』第5巻、改造社、1934年12月→同氏『国史説苑』明治書院、1939年3月）

山本信吉「（口絵）後宇多院宸記（文保三年具注暦）御自筆本 一卷」（『日本歴史』第329号、1975年10月）

米田雄介「鎌倉時代の天皇の日記 後宇多天皇」（同氏『歴代天皇の記録』続群書類従完成会、1992年5月）

VI. 『御手印遺告』

長谷宝秀「後宇多法皇御遺告」（『密宗学報』第141号、1925年4月）

岡田契昌「後宇多法皇御製の御遺告」（『密教論叢』第18号、1939年11月）

赤松俊秀『国宝 後宇多天皇宸翰 御手印遺告 解説』（大本山大覚寺、1972年1月）

武内孝善訳注・解説『後宇多法皇御入山七百年記念 詳解後宇多法皇宸翰御手印遺告』（大本山大覚寺、2007年10月）

VII. 『大覚寺聖教・文書』の目録・翻刻・調査報告

草繫全宜監修、黒田昇竜・初崎正純編『嵯峨御所大覚寺門跡聖教目録』（嵯峨御所大覚寺門跡、1967年10月）

赤松俊秀「大覚寺の古文書」（中村直勝監修、主婦の友社編『大覚寺』主婦の友社、1975年3月）

大覚寺史資料編纂室編『大覚寺文書』全2巻（大覚寺、1980年9月）

嵯峨美術短期大学総合美術研究所編『大覚寺聖教目録』（大覚寺・学校法人大覚寺学園嵯峨美術短期大学、1992年11月）

京都国立博物館編『京都社寺調査報告』XIV 大覚寺（京都国立博物館、1993年11月）

大覚寺聖教文書研究会「大覚寺聖教・文書」（『古文書研究』第40号、1995年3月）

大覚寺聖教文書研究会「大覚寺聖教函伝来文書」（『古文書研究』第41・42合併号、1995年12月）

B. 伝 記

I. 伝記・年譜

（1）単行本・雑誌特集

真言宗京都大学而真会編『密宗学報』第141号 後宇多法皇御忌紀念号（1925年4月）

大覚寺門跡編『後宇多法皇』（大覚寺門跡、1925年4月）

大本山大覚寺編『旧嵯峨御所』（大本山大覚寺、1973年6月）

（2）年譜・略伝

土宜覚了「後宇多法皇御年譜」（『密宗学報』第141号、1925年4月→大覚寺門跡編『後宇多法皇』大覚寺門跡、1925年4月／大本山大覚寺編『旧嵯峨御所』大本山大覚寺、1973年6月）

栗野秀穂「後宇多法皇と復古の御精神」（『史蹟と古美術』第11巻第4号、1933年10月）

水戸部正男「後宇多天皇」（肥後和男編『歴代天皇紀』秋田書店、1972年11月）

II. 辞典項目

（1）日本史辞典

三好不二雄「後宇多天皇」（富山房国史辞典編纂部編『国史辞典』第3巻 き一こ、富山房、1942年2月）

荻野三七彦「後宇多天皇宸記」（富山房国史辞典編纂部編『国史辞典』第3巻 き一こ、富山房、1942年2月）

荻野三七彦「後宇多天皇」「後宇多天皇宸記」（河出孝雄編『日本歴史大辞典』第7巻、河出書房、1957年11月→増補改訂版、河出書房新社、1974年2月→普及新版、1985年4月）

奥野高広「後宇多上皇御領」（河出孝雄編『日本歴史大辞典』第7巻、河出書房、1957年11月→増補改訂版、河出書房新社、1974年2月→普及新版、1985年

4月)

上横手雅敬「後宇多天皇」、石田茂輔「蓮華峰寺陵」(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第5巻 け～こほ、吉川弘文館、1985年2月→米田雄介編『歴代天皇・年号事典』吉川弘文館、2003年12月／平野邦雄・瀬野精一郎編『日本古代中世人名辞典』吉川弘文館、2006年11月)

上横手雅敬「後宇多天皇宸記」(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第5巻 け～こほ、吉川弘文館、1985年2月→加藤友康・由井正臣編『日本史文献解題辞典』吉川弘文館、2000年5月)

奥野高広「後宇多天皇 所領」(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第5巻 け～こほ、吉川弘文館、1985年2月)→「後宇多天皇領」(瀬野精一郎編『日本荘園史大辞典』吉川弘文館、2003年3月)

上横手雅敬「後宇多天皇」(京大日本史辞典編纂会編『新編 日本史辞典』東京創元社、1990年6月)

飯倉晴武「後宇多天皇」(青木和夫ほか編『日本史大事典』第3巻 こ～し、平凡社、1993年5月)

櫻井 彦「後宇多天皇」(永原慶二ほか編『日本歴史大事典』第2巻 こ～て、小学館、2000年10月)

市沢 哲「後宇多天皇日記」(永原慶二ほか編『日本歴史大事典』第2巻 こ～て、小学館、2000年10月)

(2) 文学辞典

谷 鼎「後宇多天皇」(窪田空穂ほか監修、伊藤嘉夫ほか編『和歌文学大辞典』明治書院、1962年11月)

三角洋一「後宇多天皇」(日本古典文学大辞典編集委員会編『日本古典文学大辞典』第2巻 かま～こ、岩波書店、1984年1月)

和田英道「後宇多天皇」(犬養廉ほか編『和歌大辞典』明治書院、1986年3月)

執筆者不明「後宇多天皇」(市古貞次監修『国書人名辞典』第2巻、岩波書店、1995年5月)

久保田淳「後宇多天皇」(大曾根章介ほか編『日本古典文学大事典』明治書院、1998年6月)

(3) 人物辞典

- 樹下快淳「後宇多天皇」（下中弥三郎編『新撰大人名辞典』第2巻 カーコン、平凡社、1937年7月→改題復刻版『日本人名大事典』第2巻、1979年7月）
- 宮崎康充「後宇多天皇」（安田元久編『鎌倉・室町人名事典』新人物往来社、1985年11月→コンパクト版、1990年9月）
- 本郷和人「後宇多天皇」（朝日新聞社編『朝日 日本歴史人物事典』朝日新聞社、1994年11月）
- 柳澤五郎「後宇多天皇」（志村有弘編『天皇皇族歴史伝説大事典』勉誠出版、2008年12月）

（4）書道辞典

- 春名好重「後宇多天皇御手印遺告」「弘法大師伝」「桜井切」「紫紙金字金光明最勝王経」「松木切」（同氏編『古筆辞典』三彩社、1969年10月）
- 春名好重「後宇多天皇」「後宇多天皇置文」「後宇多天皇御手印遺告」「後宇多天皇消息」（三項目）「後宇多天皇消息案」「後宇多天皇宸記」「後宇多天皇施入状」「弘法大師伝」「後醍醐天皇・後宇多院勘返状」「桜井切」「紫紙金字金光明最勝王経」「松木切」（同氏編著『古筆大辞典』淡交社、1979年11月）
- 吉田通子「後宇多院宸記」「後宇多天皇」（小松茂美編『二玄社版 日本書道辞典』二玄社、1987年12月）
- 久保木彰一「弘法大師伝」「松木切」（小松茂美編『二玄社版 日本書道辞典』二玄社、1987年12月）

Ⅲ. 諱「世仁」と禁忌詞

- 遠藤邦基「禁忌詞と読癖—「世人（よひと）」の改読の方法—」（国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究』第16集、和泉書院、1996年10月）

C. 手 跡

- 大口周魚「後宇多天皇宸翰弘法大師伝」（『書苑』第7巻第2号、1916年12月）
- 是澤恭三「持明院・大覚寺両統の書風」（下中弥三郎編『書道全集』第19巻 日本7 鎌倉Ⅱ、平凡社、1957年5月）

- 神田喜一郎「わたくしの好きな書」(『図書』第190号、1965年6月→同氏『墨林
閒話』岩波書店、1977年10月→『神田喜一郎全集』第9巻 墨林閒話
・燉煌学五十年、同朋舎出版、1984年10月／小松茂美編『日本の名随
筆』第64巻 書、作品社、1988年2月)
- 赤松俊秀「大覚寺の宸翰」(大覚寺編『勅封心経千百五十年記念出版 嵯峨の帝と
その御所』大覚寺、1967年4月)
- 中田勇次郎「後宇多法皇の書風」(大本山大覚寺編『旧嵯峨御所』大本山大覚寺、1973
年6月)
- 松原 茂「大師様—後宇多天皇の空海信仰—」(『水莖』第6号、1989年3月)
- 赤尾栄慶「後宇多天皇宸翰の書跡—聖教書写と空海思慕—」(『古美術』第102号、1992
年5月)
- 小松茂美「後宇多天皇筆 施入状 一卷」(同氏『天皇の書』文春新書 499、文藝春
秋、2006年4月)

D. 政 治

I. 鎌倉後期の通史・総論

- 久米邦武『大日本時代史』第6巻 南北朝時代史(早稲田大学出版部、1907年7月
→改題修訂版『日本時代史』第6巻 南北朝時代史、1927年1月)
- 三浦周行『大日本時代史』第5巻 鎌倉時代史(早稲田大学出版部、1907年8月→
改題修訂版『日本時代史』第5巻 鎌倉時代史、1926年7月→同氏『日
本史の研究』新輯1、岩波書店、1982年1月)
- 龍 肃『日本文化史』第6巻 鎌倉時代(大鑑閣、1922年7月→改題修訂版『日
本新文化史』第6巻 鎌倉時代、内外書籍株式会社、1941年1月)
- 中村直勝『日本文化史』第7巻 南北朝時代(大鑑閣、1922年8月→改題修訂版『日
本新文化史』第7巻 吉野朝時代、内外書籍株式会社、1942年7月／『中
村直勝著作集』第2巻 社会文化史、淡交社、1978年2月)
- 田中義成『南北朝時代史』(明治書院、1922年9月→復刻版、講談社学術文庫 334、1979
年1月)
- 魚澄惣五郎『綜合日本史大系』第6巻 南北朝(内外書籍株式会社、1927年2月→

- 分冊修訂版『綜合日本史大系』第 11 卷・第 12 卷 吉野朝史、1940 年 8 月～10 月)
- 辻善之助『日本文化史』第 4 卷 吉野室町時代・安土桃山時代（春秋社、1949 年 9 月)
- 龍 肅「鎌倉時代概観」（同氏『鎌倉時代』下〔京都〕貴族政治の動向と公武の交渉、春秋社、1957 年 12 月)
- 村田正志『南北朝論—史実と思想—』（日本歴史新書、至文堂、1959 年 6 月→増補版、1966 年 11 月→『村田正志著作集』第 3 卷 続々南北朝史論、思文閣出版、1983 年 12 月)
- 龍 肅『蒙古襲来』（日本歴史新書、至文堂、1959 年 9 月→増補版、1966 年 11 月)
- 黒田俊雄『日本の歴史』第 8 卷 蒙古襲来（中央公論社、1965 年 9 月→中公文庫 S—2—8、1974 年 1 月→新装改版、中央公論新社、中公文庫、2004 年 12 月)
- 福尾猛市郎『国民の歴史』第 8 卷 京・鎌倉（文英堂、1968 年 7 月)
- 網野善彦「鎌倉末期の諸矛盾」（歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本史』第 3 卷 封建社会の展開、東京大学出版会、1970 年 7 月→同氏『悪党と海賊—日本中世の政治と社会—』叢書・歴史学研究、法政大学出版局、1995 年 5 月／佐藤和彦・小林一岳編『展望日本歴史』第 10 卷 南北朝内乱、東京堂出版、2000 年 2 月／『網野善彦著作集』第 6 卷 転換期としての鎌倉末・南北朝期、岩波書店、2007 年 11 月)
- 網野善彦『日本の歴史』第 10 卷 蒙古襲来（小学館、1974 年 9 月→分冊版、小学館ライブラリー 24・25、1992 年 6 月→小学館文庫、2001 年 1 月→『網野善彦著作集』第 5 卷 蒙古襲来、岩波書店、2008 年 11 月)
- 新田英治「鎌倉後期の政治過程」（『岩波講座 日本歴史』第 6 卷 中世 2、岩波書店、1975 年 11 月)
- 佐藤進一『日本の中世国家』（日本歴史叢書、岩波書店、1983 年 4 月→岩波モダンクラシックス、岩波書店、2001 年 9 月→岩波現代文庫、2007 年 3 月)
- 田中健夫・新田英治・村井章介「蒙古襲来と鎌倉政権の動揺」（『日本歴史大系』第 2 卷 中世、山川出版社、1985 年 5 月→普及版、第 4 卷 武家政権の形成、1996 年 1 月)
- 新田英治・伊藤喜良・小泉宜右・永村眞「鎌倉幕府の倒壊」（『日本歴史大系』第

2巻 中世、山川出版社、1985年5月→普及版、第4巻 武家政権の形成、1996年1月)

五味文彦『大系 日本の歴史』第5巻 鎌倉と京 (小学館、1988年5月)

伊藤喜良『日本の歴史』第8巻 南北朝の動乱 (集英社、1992年1月)

村井章介「一三一一四世紀の日本—京都・鎌倉—」(『岩波講座 日本通史』第8巻 中世2、岩波書店、1994年3月→同氏『中世の国家と在地社会』歴史科学叢書、校倉書房、2005年12月)

笈 雅博『日本の歴史』第10巻 蒙古襲来と徳政令 (講談社、2001年8月→講談社学術文庫1910、2009年5月)

新田一郎『日本の歴史』第11巻 太平記の時代 (講談社、2001年9月→講談社学術文庫1911、2009年6月)

近藤成一「モンゴルの襲来」(同氏編『日本の時代史』第9巻 モンゴルの襲来、吉川弘文館、2003年2月)

村井章介「南北朝の動乱」(同氏編『日本の時代史』第10巻 南北朝の動乱、吉川弘文館、2003年3月)

村井章介『日本の中世』第10巻 分裂する王権と社会 (中央公論新社、2003年5月)

近藤成一「鎌倉幕府と公家政権」(五味文彦ほか編『新体系日本史』1 国家史、山川出版社、2006年8月)

美川 圭『院政—もうひとつの天皇制—』(中公新書1867、中央公論新社、2006年10月)

本郷恵子『全集 日本の歴史』第6巻 京・鎌倉 ふたつの王権 (小学館、2008年5月)

安田次郎『全集 日本の歴史』第7巻 走る悪党、蜂起する土民 (小学館、2008年6月)

河内祥輔・新田一郎『天皇の歴史』第4巻 天皇と中世の武家 (講談社、2011年3月)

II. 鎌倉後期の治天の君・政治過程・公武関係

星野 恒「両統ノ迭立」(『史学雑誌』第9編第4号・第8号・第10号・第11号、1898年4月～11月)→「両統迭立考」(同氏『史学叢説』第2集、富山房、1909年9月)

- 三浦周行「鎌倉時代の朝幕関係」（『史学雑誌』第17編第2号・第3号・第5号、1906年2月～5月→同氏『日本史の研究』第1輯、岩波書店、1922年5月→分冊復刻版、第1輯上、1981年9月）
- 栗野秀穂「後宇多上皇の院政に就て（大覚寺記念講演）」（『六大新報』第968号、1922年6月）
- 栗野秀穂「後宇多上皇の院政について」（『歴史と地理』第12巻第1号、1923年7月）
- 三浦周行「両統問題の一波瀾」（『史学雑誌』第35編第1号、1924年1月→同氏『日本史の研究』第2輯、岩波書店、1930年4月→分冊復刻版、第2輯上、1981年11月）
- 栗野秀穂「後宇多上皇の院政について」（『密宗学報』第141号、1925年4月→大覚寺門跡編『後宇多法皇』大覚寺門跡、1925年4月／大本山大覚寺編『旧嵯峨御所』大本山大覚寺、1973年6月）
- 八代国治「長講堂領の研究」（同氏『国史叢説』吉川弘文館、1925年5月）
- 赤松俊秀「京極准后に就いて」（『歴史と地理』第30巻第6号、1932年12月）
- 村田正志「南朝正統の歴史的批判」（同氏『南北朝史論』中央公論社、1949年10月→『村田正志著作集』第1巻 南北朝史論、思文閣出版、1983年3月）
- 飯田久雄「鎌倉時代に於ける公武交渉史の一齣一後嵯峨院政の成立事情一」（『西日本史学』第6号、1951年3月）
- 龍 肅「後嵯峨院の素意と関東申次」（同氏『鎌倉時代』下〔京都〕貴族政治の動向と公武の交渉、春秋社、1957年12月）
- 高梨（立花）みどり「金沢貞顕書状を通してみた金沢貞顕について」（1958年度立正大学二部卒業論文→立花みどり『金沢貞顕書状を通してみた金沢貞顕とその周辺の人物について』私家版、2001年5月）
- 富田正弘「中世公家政治文書の再検討②「御教書」一院宣・綸旨など一」（『歴史公論』第4巻第11号、1978年11月）
- 梶 博行「中世における公武関係一関東申次と皇位継承一」（『鎌倉』第32号、1979年9月）
- 森 茂暁「鎌倉後期政治史の一齣一皇位継承をめぐる朝幕関係一」（『日本歴史』第410号、1982年7月）→「鎌倉後期の朝幕関係一皇位継承をめぐって一」（同氏『南北朝期公武関係史の研究』文献出版、1984年6月→増補改訂版、思文閣出版、2008年7月）

- 網野善彦「文永以後新関停止令について」(『年報中世史研究』第9号、1984年5月)→同氏『悪党と海賊—日本中世の政治と社会—』叢書・歴史学研究、法政大学出版局、1995年5月→『網野善彦著作集』第6巻 転換期としての鎌倉末・南北朝期、岩波書店、2007年11月)
- 森 茂暁「鎌倉期の公武交渉関係文書について—朝廷から幕府へ—」(『金沢文庫研究』第273号、1984年9月)→「幕府への勅裁伝達と関東申次」(同氏『鎌倉時代の朝幕関係』思文閣史学叢書、思文閣出版、1991年6月)
- 外岡慎一郎「鎌倉後期の公武交渉について—公武交渉文書の分析—」(『敦賀論叢』創刊号、1987年1月)
- 森 茂暁「東使考—鎌倉期の公武交渉の一側面—」(川添昭二先生還暦記念会編『日本中世史論攷』文献出版、1987年3月)→「東使」とその役割」(同氏『鎌倉時代の朝幕関係』思文閣史学叢書、思文閣出版、1991年6月)
- 近藤成一「中世王権の構造」(『歴史学研究』第573号、1987年10月)
- 高木葉子「後深草院政の成立過程 (I) (II) —関白鷹司兼平・太政大臣鷹司基忠の離任とその帰結—」(『政治経済史学』第268号~第269号、1988年8月~9月)
- 羽下徳彦「『花園天皇宸記』と文保御和談」(『季刊 ぐんしょ』再刊第2号、1988年10月)→同氏『点景の中世—武家の法と社会—』吉川弘文館、1997年6月)
- 五味文彦「王法と仏法—両様の接近—」(『仏教 別冊』第2号、1989年11月)
- 五味文彦「王権と幕府—殺生禁断令を媒介に—」(『別冊文藝・天皇制【歴史・王権・大嘗祭】』河出書房新社、1990年11月)
- 森 茂暁「幕府への勅裁伝達と関東申次」「関東申次施行状の成立」「関東申次制の意義」(同氏『鎌倉時代の朝幕関係』思文閣史学叢書、思文閣出版、1991年6月)
- 市沢 哲「鎌倉後期の公家政権の構造と展開—建武新政への一展望—」(『日本史研究』第355号、1992年3月)→佐藤和彦・小林一岳編『展望日本歴史』第10巻 南北朝内乱、東京堂出版、2000年2月/同氏『日本中世公家政治史の研究』歴史科学叢書、校倉書房、2011年9月)
- 松蘭 斉「中世天皇の「家」について—「日記の家」の視点から—」(『愛知学院大学文学部紀要』第21号、1992年3月)→「天皇家」(同氏『日記の家—中世国家の記録組織—』吉川弘文館、1997年8月)

- 笥 敏生「中世の太上天皇について」（『年報中世史研究』第 17 号、1992 年 5 月）
→「中世王権の特質」（同氏『古代王権と律令国家』歴史科学叢書、校倉書房、2002 年 12 月）
- 白根靖大「院政の諸段階における院司の存在意義—院政期～鎌倉後期を通して—」（『歴史』第 79 号、1992 年 9 月）→「院司の基礎的考察」（同氏『中世の王朝社会と院政』吉川弘文館、2000 年 2 月）
- 古澤直人「北条氏の専制と建武新政」（永原慶二ほか編『講座 前近代の天皇』第 1 巻 天皇権力の構造と展開 その 1、青木書店、1992 年 12 月）
- 笥 雅博「公家政権と京都」（『岩波講座 日本通史』第 8 巻 中世 2、岩波書店、1994 年 3 月）
- 本郷和人「持明院・大覚寺両統の治世」（同氏『中世朝廷訴訟の研究』東京大学出版会、1995 年 4 月）
- 石澤一志「西園寺実兼 年譜」（『国文鶴見』第 30 号、1995 年 12 月）
- 本郷和人「文保の和談—鎌倉時代、皇位の継承はだれが定めたか—」（『UP』第 281 号、1996 年 3 月）
- 五味文彦「後宇多上皇の記憶」（同氏『『徒然草』の歴史学』朝日選書 577、朝日新聞社、1997 年 5 月）
- 石澤一志「西園寺実兼年譜 増補—付伝記小考—」（『国文鶴見』第 32 号、1997 年 12 月）
- 福眞睦城「『鎌倉遺文』文書名の再検討—第二六・二七・二八巻所収院宣について—」（『鎌倉遺文研究』第 2 号、1998 年 9 月）
- 本郷和人「『鎌倉時代の論旨・院宣』入門」（『遙かなる中世』第 17 号、1998 年 10 月）
- 藤田明良「鎌倉後期の大阪湾岸—治天の君と関所—」（『ヒストリア』第 162 号、1998 年 11 月）
- 近藤成一「院宣・論旨をめぐる若干の論点」（同氏編『論旨・院宣の網羅的収集による帰納的研究』1996 年度～1998 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書（課題番号 08451074）、1999 年 3 月）
- 近藤成一「両統迭立期の院宣と論旨」（鎌倉遺文研究会編『鎌倉遺文研究』I 鎌倉時代の政治と経済、東京堂出版、1999 年 4 月）
- 福田敬子「鎌倉後期の寄進関（上）（下）」（『〔神戸市立工業高等専門学校〕研究紀要』第 38-1 号～第 38-2 号、1999 年 8 月～2000 年 3 月）

- 宮崎康充「鎌倉時代の検非違使」(『書陵部紀要』第51号、2000年3月)
- 本郷和人「外戚としての西園寺氏」(『季刊 ぐんしょ』再刊第51号、2001年1月)
- 菊地大樹「宗尊親王の王孫と大覚寺統の諸段階」(『歴史学研究』第747号、2001年3月)
- 本郷和人「西園寺氏再考」(『日本歴史』第634号、2001年3月)
- 森 茂暁「元亨三年十二月の「御産御祈」五壇法について」(『鎌倉遺文研究』第7号、2001年4月→同氏『中世日本の政治と文化』思文閣史学叢書、思文閣出版、2006年10月)
- 細川重男「飯沼大夫判官と両統迭立—「平頼綱政権」の再検討」(『白山史学』第38号、2002年4月)→「飯沼大夫判官資宗—「平頼綱政権」の再検討—」(同氏『鎌倉北条氏の神話と歴史—権威と権力—』(日本史史料研究会研究選書1、日本史史料研究会、2007年10月)
- 木村英一「鎌倉幕府京都大番役の勤仕先について」(『待兼山論叢』史学篇 第36号、2002年12月)
- 永井 晋『金沢貞顕』(人物叢書235、吉川弘文館、2003年7月)
- 溝川晃司「鎌倉幕府派遣の対朝廷使者と朝幕交渉」(中野栄夫編『日本中世の政治と社会』吉川弘文館、2003年10月)
- 山田彩起子「鎌倉期における後宮の変容とその背景」(『文学研究論集(文学・史学・地理学)』第22号、2005年2月→同氏『中世前期女性院宮の研究』思文閣出版、2010年1月)
- 坂田美恵「寺社抗争にみる鎌倉後期の朝幕関係」(『金沢大学文学部日本史学研究室紀要』第1号、2005年3月)
- 橋本芳和「元弘元年康仁親王立太子の背景(Ⅰ)～(Ⅲ)」(『政治経済史学』第473号～第475号、2006年1月～2006年3月)
- 中井裕子「検非違使別当の人事からみる鎌倉後期の朝廷」(『日本史研究』第528号、2006年8月)
- 平泉紀房「鎌倉後期の神社御幸と「治天の君」」(『皇学館論叢』第42巻第6号、2009年12月)
- 森 茂暁「文保の和談の経緯とその政治的背景—新史料の紹介をかねて—」(『日本歴史』第739号、2009年12月)
- 佐伯智広「中世前期の政治構造と王家」(『日本史研究』第571号、2010年3月)

Ⅲ. 鎌倉後期の公家訴訟制度・新制・徳政

- 八代国治「記録所考」（『國學院雑誌』第 11 卷第 1 号～第 4 号・第 6 号、1905 年 1 月～6 月）
- 三浦周行「新制の研究（一）～（七）」（『法学論叢』第 14 卷第 6 号、第 15 卷第 1 号・第 2 号・第 4 号～第 6 号、第 16 号第 1 号、1925 年 12 月～1926 年 7 月→同氏『日本史の研究』新輯 1、岩波書店、1982 年 1 月）
- 細川亀市「中世における朝廷の民事裁判所—記録所について—」（『法曹会雑誌』第 14 卷第 1 号、1936 年 1 月）
- 細川亀市「中世公家法における民事訴訟法—院庁の文殿に就て—」（『法曹会雑誌』第 15 卷第 4 号、1937 年 4 月）
- 古田（水戸部）正男「鎌倉時代の記録所に就て」（『史潮』第 8 年第 1 号、1938 年 3 月）
- 水戸部正男『公家新制の研究』（創文社、1961 年 11 月）
- 橋本義彦「院評定制について」（『日本歴史』第 261 号、1970 年 2 月→北爪真佐夫・黒川高明編『論集 日本歴史』第 4 卷 鎌倉政権、有精堂、1976 年 2 月／同氏『平安貴族社会の研究』吉川弘文館、1976 年 9 月）
- 笠松宏至「中世の政治社会思想」（『岩波講座 日本歴史』第 7 卷 中世 3、岩波書店、1976 年 4 月→同氏『日本中世法史論』東京大学出版会、1979 年 3 月／佐藤和彦・小林一岳編『展望日本歴史』第 10 卷 南北朝内乱、東京堂出版、2000 年 2 月）
- 橋本初子「公家訴訟における文書の機能論的考察」（『古文書研究』第 14 号、1979 年 12 月→日本古文書学会編『日本古文書学論集』第 4 卷 古代Ⅱ 奈良・平安時代の文書、吉川弘文館、1988 年 7 月）
- 後藤紀彦「『田中本制符』—分類を試みた公家新制の古写本—」（『年報中世史研究』第 5 号、1980 年 5 月）
- 佐々木文昭「鎌倉期公家新制研究序説」（佐伯有清編『日本古代史論考』吉川弘文館、1980 年 11 月）→「鎌倉時代の公家新制」（同氏『中世公武新制の研究』吉川弘文館、2008 年 6 月）
- 笠松宏至「鎌倉後期の公家法について」（『日本思想大系』第 22 卷 中世政治社会思想 下、1981 年 2 月）
- 橋本初子「中世の検非違使庁関係文書について」（『古文書研究』第 16 号、1981 年 7 月）

- 笠松宏至『徳政令—中世の法と慣習—』（岩波新書 218、岩波書店、1983年1月）
- 藤原良章「公家庭中の成立と奉行—中世公家訴訟制に関する基礎的考察—」（『史学雑誌』第94編第11号、1985年11月→同氏『中世的思惟とその社会』吉川弘文館、1997年5月）
- 森 茂暁「鎌倉後期における公家訴訟制度の展開」（時野谷滋博士還暦記念論集刊行会編『時野谷滋博士還暦記念 制度史論集』時野谷滋博士還暦記念論集刊行会、1986年12月→同氏『鎌倉時代の朝幕関係』思文閣史学叢書、思文閣出版、1991年6月）
- 稲葉伸道「新制の研究—徳政との関連を中心に—」（『史学雑誌』第96編第1号、1987年1月→大石直正・柳原敏昭編『展望日本歴史』第9巻 中世社会の成立、東京堂出版、2001年5月）
- 稲葉伸道「中世の訴訟と裁判—鎌倉後期の雑訴興行と越訴—」（朝尾直弘ほか編『日本の社会史』第5巻 裁判と規範、岩波書店、1987年5月）
- 本郷和人「鎌倉時代の朝廷訴訟に関する一考察」（石井進編『中世の人と政治』吉川弘文館、1988年7月）
- 美川 圭「院政をめぐる公卿議定制の展開—在宅諮問・議奏公卿・院評定制—」（『日本史研究』第348号、1991年8月→同氏『院政の研究』臨川書店、1996年11月）
- 榎原雅治「本所所蔵「文殿訴訟関係文書写」」（『東京大学史料編纂所研究紀要』第7号、1997年3月）
- 美川 圭「建武政権の前提としての公卿会議—「合議と専制」論をめぐる—」（大山喬平教授退官記念会編『日本国家の史的特質 古代・中世』思文閣出版、1997年5月）
- 金井静香「鎌倉時代の公家裁判」「公家政権の裁許と「縁」」（大山喬平編『中世裁許状の研究』塙書房、2008年10月）
- 小出麻友美「鎌倉期の公家法に見る雑訴興行とその背景—弘安八年—一月—三日後宇多天皇宣旨を題材に—」（『年報三田中世史研究』第15号、2008年10月）

IV. 鎌倉後期の貴族社会

- 白井信義「治世の交替と廷臣所領の転変—山科家の係争—」（『日本歴史』第253号、1969年6月）

- 羽下徳彦「家と一族」（朝尾直弘ほか編『日本の社会史』第6巻 社会的諸集団、岩波書店、1988年6月）
- 市沢 哲「鎌倉後期公家社会の構造と『治天の君』（『日本史研究』第314号、1988年10月→同氏『日本中世公家政治史の研究』歴史科学叢書、校倉書房、2011年9月）
- 百瀬今朝雄「中納言へ昇進の道—参議癸十五年—」（『立正大学大学院紀要』第7号、1991年2月）→「中納言への道（一）—参議癸十五年—」（同氏『弘安書札礼の研究—中世公家社会における家格の桎梏—』東京大学出版会、2000年5月）
- 百瀬今朝雄「中納言への道—参議大弁・檢非違使別当—」（『立正史学』第78号、1995年9月）→「中納言への道（二）—参議大弁・檢非違使別当—」（同氏『弘安書札礼の研究—中世公家社会における家格の桎梏—』東京大学出版会、2000年5月）
- 本郷恵子「鎌倉期の朝廷財政について」（『歴史学研究』第677号、1995年10月）
- 菅原正子「山科家領荘園の研究」（同氏『中世公家の経済と文化』吉川弘文館、1998年1月）
- 本郷恵子「公家政権の経済的変質」（同氏『中世公家政権の研究』東京大学出版会、1998年3月）
- 白根靖大「鎌倉後期の公家社会と治天」（同氏『中世の王朝社会と院政』吉川弘文館、2000年2月）
- 百瀬今朝雄「弘安書札礼の意義」（同氏『弘安書札礼の研究—中世公家社会における家格の桎梏—』東京大学出版会、2000年5月）
- 筧 雅博「中世の公と私」（網野善彦編集協力『ものがたり日本列島に生きた人たち』3 文書と記録 上、岩波書店、2000年6月）
- 宮崎康充「三事兼帯と名家の輩」（『日本歴史』第626号、2000年7月）
- 小川剛生「知と血—撰関家の公事の説をめぐって—」（院政期文化研究会編『院政期文化論集』第1巻 権力と文化、森話社、2001年9月）
- 松菌 斉「鎌倉時代の撰関家について—公事師範化の分析—」（鎌倉遺文研究会編『鎌倉遺文研究』Ⅲ 鎌倉期社会と史料論』東京堂出版、2002年5月）
- 樋口健太郎「准大臣制の成立と貴族社会—鎌倉後期の家格再編と南北朝・室町期への展開—」（『年報中世史研究』第34号、2009年5月→同氏『中世撰関家の家と権力』歴史科学叢書、校倉書房、2011年2月）

E. 仏 教

I. 後宇多の仏教信仰

- 妻木直良「後宇多天皇と対仏教の偉蹟」(『高野山時報』第58号、1916年1月)
- 猪熊信男「後宇多天皇の御信仰に就て」(『密宗学報』第141号、1925年4月→大覚寺門跡編『後宇多法皇』大覚寺門跡、1925年4月／大本山大覚寺編『旧嵯峨御所』大本山大覚寺、1973年6月)

II. 後宇多の密教興隆に関する総論

- 祖風宣揚会編「後宇多天皇」(同会編『皇室と真言宗』六大新報社、1915年11月)
- 辻善之助「後宇多天皇の御信仰と朝幕関係」(『太陽』増刊号、1921年6月→同氏『日本仏教史之研究』続篇、金港堂書籍、1931年1月→『日本仏教史研究』第3巻 日本仏教史之研究 続篇上、岩波書店、1984年1月)
- 浅井義明「後宇多法皇御出家の動機」(『密宗学報』第141号、1925年4月→大覚寺門跡編『後宇多法皇』大覚寺門跡、1925年4月／大本山大覚寺編『旧嵯峨御所』大本山大覚寺、1973年6月)
- 三浦章夫「後宇多法皇の密教」(『密教論叢』第12号、1937年11月)
- 宮崎栄雅「後宇多法皇の密教御信仰について」(『密教論叢』第16・17合併号、1939年6月)
- 三浦章夫「わが皇室と真言宗」(『密教論叢』第18号、1939年11月)
- 辻善之助「密教興隆」(同氏『日本仏教史』第3巻 中世篇之2、岩波書店、1949年1月)
- 萩原龍夫「中世に於ける天皇親政の問題」(『史潮』第42号(復刊第1号)、1949年3月)
- 永村 眞「寺院と天皇」(『講座 前近代の天皇』第3巻 天皇と社会諸集団、青木書店、1993年5月)
- 阿部泰郎「中世密教のスペクトラム」(『芸術新潮』第62巻第8号、2011年8月)

III. 後宇多の弘法大師信仰

- 執筆者不明「後宇多法皇御撰述の弘法大師伝記」（『伝燈』第 37 号、1893 年 1 月）
- 小原洪秀「後宇多法皇の高祖大師御敬慕の一端」（『密宗学報』第 103 号、1922 年 1 月）
- 宮崎忍海「後宇多天皇と弘法大師」（『六大新報』第 967 号、1922 年 6 月）
- 高見寛応「法皇御製の宗祖伝」（『密宗学報』第 141 号、1925 年 4 月→大覚寺門跡編『後宇多法皇』大覚寺門跡、1925 年 4 月／大本山大覚寺編『旧嵯峨御所』大本山大覚寺、1973 年 6 月）

IV. 後宇多の密教受法

- 勝野隆信「後宇多院御灌頂記」（続群書類従完成会編『群書解題』第 17 卷、続群書類従完成会、1962 年 7 月→改訂版、『群書解題』第 7 卷、続群書類従完成会、1986 年 8 月）
- 下出積与「後宇多院御灌頂記」（続群書類従完成会編『群書解題』第 16 卷下、続群書類従完成会、1963 年 8 月→改訂版、『群書解題』第 7 卷、続群書類従完成会、1986 年 8 月）
- 速水 侑「密教灌頂一儀礼と芸能の接点一」（網野善彦ほか編『体系 日本歴史と芸能一音と文字と映像による一』第 2 卷 古代仏教の荘厳一国家・権力・音一、平凡社、1990 年 9 月→同氏『平安仏教と末法思想』吉川弘文館、2006 年 10 月）
- 上野勝久「鎌倉時代の東寺伝法灌頂図について」（『日本建築学会』1991 年度大会（東北）学術講演梗概集』F 分冊 都市計画 建築経済・住宅問題 建築歴史・意匠、1991 年 8 月）
- 藤井雅子「後宇多法皇と「御法流」」（『史艸』第 37 号、1996 年 11 月）→「後宇多法皇による真言密教事相の受法」（同氏『中世醍醐寺と真言密教』勉誠出版、2008 年 9 月）
- 真木隆行「後宇多天皇の密教受法」（大阪大学文学部日本史研究室編『大阪大学文学部日本史研究室創立 50 周年記念論文集 古代中世の社会と国家』清文堂出版、1998 年 12 月）
- 淵田雲溪「後宇多法皇の密教と、大覚寺統における相承」（『高野山大学論叢』第 46 卷、2011 年 2 月）
- 淵田雲溪「大覚寺統における密教の受法とその周辺」（『密教学研究』第 43 号、2011 年 3 月）

V. 後宇多と即位灌頂

- 阿部泰郎「宝珠と王権—中世王権と密教儀礼—」（『岩波講座 東洋思想』第16巻 日本思想2、岩波書店、1989年3月）
- 門屋 温「『両宮本誓理趣摩訶衍』考—中世神道論書研究（一）」（『東洋哲学論叢』創刊号、1992年6月）
- 門屋 温「両部神道試論—『鼻帛書』の成立をめぐって—」（『東洋の思想と宗教』第10号、1993年6月）
- 桜井好朗「東寺即位法の三印二明について」（長谷川端編『太平記とその周辺』新典社研究叢書71、新典社、1994年4月→同氏『儀礼国家の解体—中世文化史論集—』吉川弘文館、1996年6月）
- 寺井 光「天皇即位秘儀説の形成について—即位灌頂と四海領掌法—」（上横手雅敬編『中世の寺社と信仰』吉川弘文館、2001年8月）
- 松本郁代「醍醐寺三宝院流の即位法と王統分立」（『仏教文学』第28号、2004年3月）→「醍醐寺三宝院流の即位法と王統分立—地藏院方と報恩院方をめぐって—」（同氏『中世王権と即位灌頂』森話社、2005年12月）

VI. 後宇多の真言教学振興

- 上田進城「後宇多法皇の宗学振興—特に教王常住院について—」（『密宗学報』第189号、1929年6月）
- 梅尾祥雲「教学の発展」（同氏『秘密仏教史』高野山大学出版部、1933年11月→高野山大学密教文化研究所編『梅尾祥雲全集』第1巻 秘密仏教史、高野山大学密教文化研究所、1982年2月）
- 梅尾祥雲「京洛の談論学道」（同氏『日本密教学道史』高野山大学出版部、1942年8月→高野山大学密教文化研究所編『梅尾祥雲全集』第6巻 日本密教学道史、高野山大学密教文化研究所、1982年4月）
- 中村本然「『釈摩訶衍論私記』について」（高野山大学創立百十周年記念論文集編集委員会編『高野山大学創立百十周年記念 高野山大学論文集』高野山大学、1996年9月）
- 中村本然「『釈摩訶衍論私記』について〈II〉」（三派合同記念論集編集委員会編『頼瑜僧正七百年御遠忌記念論集 新義真言教学の研究』大蔵出版、2002年10月）

VII. 後宇多と真言諸寺院

（1）大覚寺

- 黒板勝実『後宇多法皇と大覚寺 附心経殿に就て』（大覚寺心経会、1921年4月）
- 黒板勝美「大覚寺の沿革と宸筆心経とに就て」（『六大新報』第909号、1921年4月）
- 栗野秀穂「後宇多法皇の御宸翰について（上）」（『歴史と地理』第10巻第1号、1922年7月）※続篇確認できず。
- 黒板勝美「後宇多法皇と大覚寺」（『歴史と地理』第12巻第1号、1923年7月→『虚心文集』第2巻、吉川弘文館、1939年11月）→「御皇室と大覚寺—後宇多法皇と大覚寺—」（大本山大覚寺編『旧嵯峨御所』大本山大覚寺、1973年6月）
- 土宜覚了「後宇多法皇と大覚寺（一）～（四）」（『六大新報』第1091号～第1095号、1924年11月～12月）
- 岡崎密乗「後宇多亀山両帝御遠忌に就て—真言宗の独占すべき法会ではない—」（『六大新報』第1110号、1925年4月）
- 小田慈舟「勅封心経について」（『密宗学報』第141号、1925年4月→大覚寺門跡編『後宇多法皇』大覚寺門跡、1925年4月）
- 中村直勝「南北両朝の対立と大覚寺」（『密教学報』第141号、1925年4月→同氏『南朝の研究』星野書店、1927年6月／大本山大覚寺編『旧嵯峨御所』大本山大覚寺、1973年6月→『中村直勝著作集』第3巻 南朝の研究、淡交社、1978年4月）
- 野村晴嵐「後宇多法皇と大覚寺」（『密宗学報』第141号、1925年4月→大覚寺門跡編『後宇多法皇』大覚寺門跡、1925年4月／大本山大覚寺編『旧嵯峨御所』大本山大覚寺、1973年6月）
- 服部如実「大覚寺と永宣旨」（『密宗学報』第141号、1925年4月→大覚寺門跡編『後宇多法皇』大覚寺門跡、1925年4月／大本山大覚寺編『旧嵯峨御所』大本山大覚寺、1973年6月）
- 三好龍彰「大覚寺略史」（『密宗学報』第141号、1925年4月→大覚寺門跡編『後宇多法皇』大覚寺門跡、1925年4月）
- 三好龍彰「大覚寺の沿革の大要」（同氏編『大覚寺史略』大本山大覚寺、1935年5月）

- 赤松俊秀「大覚寺」(京都府編『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第18冊、1938年3月→臨川書店、1983年9月)→「大覚寺蔵後宇多天皇宸翰について」(同氏『京都寺史考』仏教史学研究双書、法蔵館、1972年9月)
- 文 部 省「大覚寺御所趾」(『史蹟調査報告』第12輯 歴代天皇聖蹟、文部省、1939年3月)
- 加藤純隆「金剛抄」(続群書類従完成会編『群書解題』第17巻、続群書類従完成会、1962年7月→改訂版、『群書解題』第7巻、続群書類従完成会、1986年8月)
- 久保田収「大覚寺門跡次第」(続群書類従完成会編『群書解題』第2巻上、続群書類従完成会、1963年2月→改訂版、『群書解題』第5巻、続群書類従完成会、1986年6月)
- 久保田収「大覚寺門跡略記」(続群書類従完成会編『群書解題』第2巻上、続群書類従完成会、1963年2月→改訂版、『群書解題』第5巻、続群書類従完成会、1986年6月)
- 林 幹弥「書評と紹介 赤松俊秀著『京都寺史稿』」(『日本歴史』第302号、1973年7月)
- 佐和隆研「大覚寺の歴史と美術」(同氏『密教の寺—その歴史と美術—』法蔵館、1974年11月→『佐和隆研著作集』第2巻 日本の密教美術、法蔵館、1997年1月)
- 中村直勝「大覚寺の歴史」(同氏監修、主婦の友社編『大覚寺』主婦の友社、1975年3月)
- 福山敏男「門跡寺院誕生」(景山春樹ほか『比叡山 I — 1200年の歩み—』朝日カルチャーブックス60、大阪書籍、1986年3月)
- 川嶋将生「大覚寺の歴史」(京都国立博物館編『嵯峨御所 大覚寺の名宝』日本経済新聞社、1992年4月)
- 細川涼一「中世寺院の稚児と男色—謠曲「経正」「花月」と同性愛—」(同氏『逸脱の日本中世—狂気・倒錯・魔の世界—』JICC出版局、1993年3月→新装版、洋泉社、1996年8月→ちくま学芸文庫、筑摩書房、2000年6月)
- 高橋慎一郎「長福寺文書にまぎれこんだ大覚寺文書」(『遙かなる中世』第13号、1994年1月)
- 高橋慎一郎「仏名院と醍醐寺三宝院」(『東京大学史料編纂所研究紀要』第6号、1996

年 3 月)

- 橋本義則「史料から見た嵯峨院と大覚寺—嵯峨院の成立から大覚寺の再興まで—」
（旧嵯峨御所大覚寺『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告—大沢池北岸域復
原整備事業に伴う調査—』旧嵯峨御所大覚寺、1997年3月）
- 大田壮一郎「大覚寺門跡の形成と室町幕府—内乱期の位置付けを中心に—」（『日
本思想史研究会会報』第15号、1997年11月）
- 横内裕人「仁和寺と大覚寺—御流の継承と後宇多院—」（山崎誠・阿部泰郎編『守
覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究』論文編、勉誠社、1998年2月
→同氏『日本中世の仏教と東アジア』塙書房、2008年2月）
- 大田壮一郎「大覚寺門跡と室町幕府—南北朝～室町期を中心に—」（『日本史研究』
第443号、1999年7月）
- 金井静香「大覚寺統管領寺院の再編—南池院・清閑寺大勝院を中心に—」（上横手
雅敬編『中世の寺社と信仰』吉川弘文館、2001年8月）
- 高橋一樹「南北朝初期の大覚寺宮関係文書二通」（『国立歴史民俗博物館研究報告』
第97集、2002年3月）
- 西村彰則「南北朝期の寺社勢力」（『龍谷大学大学院文学研究科紀要』第24集、2002
年12月）
- 小峯和明「イェール大学蔵『元徳二年後宇多院聖忌曼荼羅供』」（同氏編『『平家物
語』の転生と再生』笠間書院、2003年3月）
- 三浦龍昭「南北朝初期の大覚寺宮に関する新資料 『東寺宝菩提院三密蔵聖教』一
五八函一四号文書について」（『大正大学総合佛教研究所年報』第26号、
2004年3月）
- 高橋秀城「随心院蔵『〔慧仁印信記〕』他二種翻刻—仁空実導の密教関係史料—」（『随
心院聖教と寺院ネットワーク』第3集、2007年3月）
- 松尾剛次「叡尊教団と中世都市平安京—中世平安京の境界に立つ律寺—」（『戒律
文化』第6号、2008年3月→同氏『中世律宗と死の文化』吉川弘文館、2010
年12月）
- 武内孝善「大覚寺の歴史」（下泉恵尚・山折哲雄『新版古寺巡礼 京都』28 大覚寺、
淡交社、2008年12月）
- 坂口太郎「東京大学史料編纂所蔵『五大虚空蔵法記』について—後醍醐天皇と後宇
多院法流—」（『古文書研究』第72号、2011年10月）

(2) 醍醐寺

- 辻善之助「両統対立の反映として三宝院流嫡庶の争」(『歴史と地理』第12巻第1号、1923年7月→同氏『日本仏教史之研究』続篇、金港堂書籍、1931年1月→『日本仏教史研究』第3巻 日本仏教史之研究 続篇上、岩波書店、1984年1月)
- 中島俊司「後宇多法皇の御帰依と報恩院」(同氏『醍醐寺略史』醍醐寺寺務所、1930年6月)
- 梅尾祥雲「南北朝と醍醐寺」(同氏『秘密仏教史』高野山大学出版部、1933年11月→高野山大学密教文化研究所編『梅尾祥雲全集』第1巻 秘密仏教史、高野山大学密教文化研究所、1982年2月)
- 永村 眞「鎌倉仏教の展開」(安田元久編『古文書の語る日本史』第3巻 鎌倉、筑摩書房、1990年1月)
- 永村 眞「醍醐寺報恩院と走湯山密厳院」(『静岡県史研究』第6号、1990年3月)
- 澤 博勝「両統迭立期の王権と仏教一青蓮院と醍醐寺を中心に」(『歴史学研究』第648号、1993年8月)
- 藤井雅子「南北朝期における三宝院門跡の確立」(『日本歴史』第654号、2002年11月)→「鎌倉時代における三宝院流の分派と嫡流」「醍醐寺における三宝院門跡の立場」(同氏『中世醍醐寺と真言密教』勉誠出版、2008年9月)
- 内田啓一「醍醐報恩院流」(同氏『文観房弘真と美術』法蔵館、2006年2月)
- 藤井雅子「後宇多法皇と醍醐寺」(同氏『中世醍醐寺と真言密教』勉誠出版、2008年9月)
- 藤井雅子「南北朝の動乱と醍醐寺一主に報恩院隆舜を通して」(永村眞編『醍醐寺の歴史と文化財』勉誠出版、2011年3月)

(3) 東寺

- 口入田覚了「大本山教王護国寺(東寺)の沿革」(『六大新報』第904号、1921年3月)
- 松永昇道「後宇多法皇と東寺」(『六大新報』第904号、1921年3月)
- 勅賜東寺一千百年記念法会臨時事務局(口入田覚了編纂主任)「後宇多法皇と東寺」(同事務局編『東寺略史』勅賜東寺一千百年記念法会臨時事務局、1922

年4月)

山本忍梁「後宇多法皇と東寺」(『密宗学報』第141号、1925年4月→大覚寺門跡編『後宇多法皇』大覚寺門跡、1925年4月／大本山大覚寺編『旧嵯峨御所』大本山大覚寺、1973年6月)

大北善照「南山学派と東寺学派(一)～(三)」(『密教研究』第20号～第22号、1926年3月～1926年10月)

細川亀市「後宇多天皇と東寺領」(同氏『日本仏教経済史論考』白東社、1932年7月→改訂版、東学社、1936年12月)

竹内理三「荘園変質期の東寺領(一)～(三)」(『社会経済史学』第10巻第1号～第3号、1936年4月～6月)→「変質期寺領荘園の構造—東寺領に就いて—」(同氏『寺領荘園の研究』畝傍書房、1942年1月→復刻版、吉川弘文館、1983年3月／『竹内理三著作集』第3巻 寺領荘園の研究、角川書店、1999年11月)

網野善彦「東寺学衆方荘園の成立」(宝月圭吾先生還暦記念会編『日本社会経済史研究』古代中世編、吉川弘文館、1967年10月)→「東寺学衆と学衆方荘園の成立」(同氏『中世東寺と東寺領荘園』東京大学出版会、1978年11月→『網野善彦著作集』第2巻 中世東寺と東寺領荘園、岩波書店、2007年9月)

中村 研「八条院町の成立と展開」(『文化史学』第25号、1969年5月→秋山國三・中村研『京都「町」の研究』叢書・歴史学研究、法政大学出版社、1975年10月)

川嶋将生「東寺領八条院町の構造と生活」(日本史研究会史料研究部会編『中世の権力と民衆』創元学術双書、創元社、1970年6月→同氏『中世京都文化の周縁』思文閣史学叢書、思文閣出版、1992年6月)

上島 有「鎌倉末・南北朝期の東寺」(同氏『京郊庄園村落の研究』塙書房、1970年8月→和多秀乗・高木神元編『日本仏教宗史論集』第4巻 弘法大師と真言宗、吉川弘文館、1984年12月)

毛利一憲「東寺修造略史—鎌倉・南北朝時代の造営料所と造営・修理—」(『〔中央大学文学部〕紀要』第80号 史学科第21号、1976年3月)

鷲尾隆輝(上島有)「東寺の歴史」(井上靖・塚本善隆監修、司馬遼太郎・鷲尾隆輝『古寺巡礼』京都1、淡交社、1976年9月)→「東寺と弘法大師信仰」(上島氏『東寺・東寺文書の研究』思文閣出版、1998年10月)

- 網野善彦「東寺修造事業の進展」(同氏『中世東寺と東寺領荘園』東京大学出版会、1978年11月→『網野善彦著作集』第2巻 中世東寺と東寺領荘園、岩波書店、2007年9月)
- 橋本初子「『仏舍利勘計記』解題—東寺伝来の仏舍利関係史料—」(景山春樹『舍利信仰—その研究と史料—』東京美術、1986年2月)→「大師請来仏舎利の信仰」(同氏『中世東寺と弘法大師信仰』思文閣史学叢書、思文閣出版、1990年11月)
- 上島 有「荘園文書」(網野善彦ほか編『講座日本荘園史』1 荘園入門、吉川弘文館、1989年7月)
- 上島 有「東寺とその庄園」(東寺(教王護国寺)宝物館編『東寺とその庄園』東寺(教王護国寺)宝物館、1993年9月)
- 上島 有「古代・中世の東寺—「教王護国寺」の歴史的考察—」(『新東宝記—東寺の歴史と美術—』真言宗総本山東寺、1995年11月→東寺創建一千二百年記念出版編纂委員会編『新東宝記—東寺の歴史と美術—』東京美術、1996年1月→同氏『東寺・東寺文書の研究』思文閣出版、1998年10月)
- 真木隆行「東寺座主構想の歴史的変遷」(『佛教史学研究』第41巻第2号、1999年3月)
- 真木隆行「鎌倉末期における東寺最頂の論理—『東宝記』成立の原風景—」(東寺文書研究会編『東寺文書にみる中世社会』東京堂出版、1999年5月)
- 上島 享「真言密教の日本的変遷」(『洛北史学』創刊号、1999年6月)
- 新見康子「東寺西院御影堂の宝物と『東宝記』」(同氏『東寺宝物の成立過程の研究』思文閣出版、2008年2月)
- 貫井裕恵「後宇多院東寺興隆政策と五日十座論義をめぐって」(海老澤衷先生の還暦を祝う会編『懸樋抄—海老澤衷先生還暦記念論文集—』海老澤衷先生の還暦を祝う会、2008年10月)
- 貫井裕恵「宮内庁書陵部所蔵『東寺草創以来事』について—『東寺草創以来事』と『東宝記』—」(『鎌倉遺文研究』第24号、2009年10月)

(4) 高野山

- 宮崎忍海「後宇多法皇と高野山」(『高野山時報』第370号、1925年5月)
- 三好伊刀(西岡虎之助)「後宇多法皇の高野山御幸」(『中央史壇』第12巻第4号、1926

年4月）→「後宇多法皇の高野山参詣」（同氏『日本文学における生活史の研究』東京大学出版会、1954年5月）

伊藤只人「高野山御幸」（紀元二千六百年奉祝会和歌山県支部編・西田直二郎校閲『和歌山県聖蹟』紀元二千六百年奉祝会和歌山県支部、1942年8月）

土井 弘「後宇多院御幸記」（続群書類従完成会編『群書解題』第2巻下、続群書類従完成会、1963年10月→改訂版、『群書解題』第5巻、続群書類従完成会、1986年6月）

堀内和明「中世前期の高野参詣とその順路」（『日本歴史』第619号、1999年12月）

村上保壽・山陰加春夫「高野山町石道」（両氏『高野への道—いにしへ人と歩く—』高野山出版社、2001年5月）

橋本芳和「正和二年後宇多院高野山御幸の一考察」（『政治経済史学』第432号、2002年8月）

牧野淳司「延慶本『平家物語』高野御幸説話の背景」（『巡礼記研究』第2集、2005年9月）

木下浩良「金剛峯寺遺跡（大乘院跡駐車場整備事業に伴う発掘調査）出土の石造物について」（元興寺文化財研究所編『金剛峯寺遺跡 KBT05-21 大乘院跡駐車場整備事業に伴う発掘調査報告書—』高野町教育委員会、2007年3月）

太田直之「中世高野山の勸進活動」（『日本史研究』第537号、2007年5月→同氏『中世の社寺と信仰—勸進と勸進聖の時代—』久伊豆神社小教院叢書6、弘文堂、2008年5月）

中村直人「後宇多法皇の高野参詣」（九度山町史編纂委員会編『改訂 九度山町史』通史編、九度山町、2009年7月）

（5）神護寺

融 道玄「皇室と神護寺」（『高野山時報』第54号、1915年11月）

小原洪秀「法皇と高野及高尾山」（『密宗学報』第141号、1925年4月→大覚寺門跡編『後宇多法皇』大覚寺門跡、1925年4月／大本山大覚寺編『旧嵯峨御所』大本山大覚寺、1973年6月）

（6）普通寺

蓮生観善「後宇多天皇と普通寺」（同氏編『普通寺史』大本山普通寺御遠忌事務局、

1932年10月)

蓮生観善「三帝陵について」(『観善和尚著作集』第2巻、総本山善通寺、1993年10月)

山之内 誠「14世紀中期の讃岐国善通寺における造営活動の様相—中世讃岐国善通寺における造営活動の研究 その2—」(『日本建築学会計画系論文集』第533号、2000年7月)

國島浩正「鎌倉時代の善通寺」「南北朝時代の善通寺」(総本山善通寺編『善通寺史—善通寺創建一二〇〇年記念出版—』五岳、2007年9月)

(7) 観心寺

井野上眞弓「文観房殊音と河内国」(『戒律文化』第2号、2003年3月)

VIII. 後宇多と本覚大師号相論

永村 眞「「真言宗」と東大寺—鎌倉後期の本末相論を通して—」(中世寺院史研究会編『中世寺院史の研究』下、法蔵館、1988年3月)

佐藤眞人「『延暦寺護国縁起』の考察—成立事情および記家との関係を中心に—」(『季刊日本思想史』第64号、2003年9月)

西尾知巳「弘安徳政と東大寺別当の性格変化—惣寺による本寺意識高揚の結末—」(『史観』第156冊、2007年3月)

永井 晋「本覚大師諡号事件にみる中世国家の意思決定—延慶年間の山門嗾訴の分析から—」(『日本仏教総合研究』第6号、2008年5月)

貫井裕恵「『東宝記』編纂の契機とそのテキスト生成をめぐって」(『巡礼記研究』第6集、2009年9月)

IX. 後宇多と天台

平 雅行「青蓮院の門跡相論と鎌倉幕府」(河音能平・福田榮次郎編『延暦寺と中世社会』法蔵館、2004年6月)

X. 後宇多と禅

櫻井景雄「後宇多法皇と歴代住持」(同氏『南禅寺史』上、大本山南禅寺、1940年4月→復刻版、法蔵館、1977年6月)

斎藤夏来「鎌倉後期の禅院住持職と政治権力」(『年報中世史研究』第25号、2000

年 5 月→同氏『禅宗官寺制度の研究』吉川弘文館、2003 年 4 月）

原田正俊「中世仏教再編期としての一四世紀」（『日本史研究』第 540 号、2007 年 8 月）

XI. 後宇多と律

細川涼一「中世律宗と国家—鎌倉末期の政治・社会状況の中で—」（『日本史研究』第 295 号、1987 年 3 月）

森 茂暁「鎌倉末期・建武新政期の長門国分寺」（『山口県史研究』第 2 号、1994 年 3 月）

大塚紀弘「日宋交流と仏牙信仰—五台山から来た仏牙舍利の行方—」（『日本歴史』第 758 号、2011 年 7 月）

XII. 後宇多と神祇

村田正志「神社制度」（『出雲』第 45 巻第 9 号、1939 年 12 月→同氏『南北朝史論』中央公論社、1949 年 10 月→『村田正志著作集』第 1 巻 南北朝史論、思文閣出版、1983 年 3 月）

市沢 哲「文和の政局」（『文学』第 4 巻第 6 号、2003 年 11 月→同氏『日本中世公家政治史の研究』歴史科学叢書、校倉書房、2011 年 9 月）

F. 和 歌・文 学

I. 鎌倉後期の歌壇史

吉澤義則「大覚寺持明院両統を背景としたる和歌の論諍」（『歴史と地理』第 12 巻第 1 号、1923 年 7 月→同氏『国語国文の研究』岩波書店、1927 年 4 月）

井上宗雄「鎌倉後期歌壇の趨勢」（『立教大学研究報告 人文科学』第 14 号、1963 年 8 月）

井上宗雄「鎌倉末・南北朝初頭歌壇における一動向—続千載集より風雅集に至る歌壇の素描—」（『立教大学日本文学』第 11 号、1963 年 11 月）

次田香澄「玉葉集の形成」（『日本学士院紀要』第 22 巻第 1 号、1964 年 3 月→同氏著・岩佐美代子責任編集『玉葉集 風雅集攷』笠間叢書 352、笠間書院、

2004年10月)

- 井上宗雄『中世歌壇史の研究 南北朝期』(明治書院、1965年11月→改訂新版、1987年5月)
- 福田秀一「延慶両卿訴陳の資料と経過補説」(『武蔵大学人文学会雑誌』第2巻第1号、1970年6月)→「玉葉集の撰者をめぐる論争—延慶両卿訴陳状の成立— III 補説」(同氏『中世和歌史の研究』角川書店、1972年3月)
- 井上宗雄「中世歌壇の展開」(有吉保ほか編『和歌文学講座』第7巻 中世の和歌、勉誠社、1994年1月)→「歌壇の概説」(同氏『中世歌壇と歌人伝の研究』笠間書院、2007年7月)
- 田村柳壹「和歌の消長」(『岩波講座 日本文学史』第5巻 13・14世紀の文学、岩波書店、1995年11月)
- 小川剛生「歌道家の人々と公家政権—『延慶両卿訴陳』をめぐって—」(兼築信行・田渕句美子編『和歌を歴史から読む』和歌文学会論集、笠間書院、2002年10月)
- 田渕句美子「鎌倉時代の歌壇と文芸」(近藤成一編『日本の時代史』第9巻 モンゴルの襲来、吉川弘文館、2003年2月)
- 小川剛生「京極為兼と公家政権—土佐配流事件を中心に—」(『文学』第4巻第6号、2003年11月)

II. 後宇多治世下における勅撰集編纂

- 福田秀一「中世勅撰和歌集の成立過程—主として十三代集について—」(成城学園五十周年記念論文集編集委員会編『成城学園五十周年記念論文集 文学』成城学園、1967年5月→同氏『中世和歌史の研究』続篇、福田恵美子、2007年2月)
- 福田秀一「中世勅撰和歌集の撰定意識—序・題号・部立構成から見た—」(『成城文芸』第47号、1967年7月→同氏『中世和歌史の研究』続篇、福田恵美子、2007年2月)
- 濱口博章「『続千載和歌集』の一考察」(『甲南大学紀要 文学編』第40号(1980年度)、1981年3月→同氏『中世和歌の研究—資料と考証—』新典社研究叢書32、新典社、1990年3月)
- 河内祥輔「学芸と天皇」(永原慶二ほか編『講座 前近代の天皇』第4巻 統制的諸機能と天皇観、青木書店、1995年6月)

- 久保田淳「新後撰和歌集 解説」（『吉田兼右筆 十三代集 新後撰和歌集』笠間書院、1996年6月）
- 國枝利久・千古利恵子「続千載和歌集の研究」（『〔仏教大学〕文学部論集』第82号、1998年3月）
- 中條敦仁「『続千載和歌集』諸本論」（『和歌文学研究』第80号、2000年6月）
- 中條敦仁「作者・官位表記異同にみる『続千載和歌集』の諸伝本と撰集過程」（『同朋文学』第30号、2001年3月）
- 深津睦夫『中世勅撰和歌集史の構想』（笠間書院、2005年3月）

Ⅲ. 後宇多主催の歌会・百首歌

- 藤平春男「亀山殿七百首」（続群書類従完成会編『群書解題』第7巻、続群書類従完成会、1961年7月→改訂版、『群書解題』第9巻、続群書類従完成会、1986年10月）
- 蒲原義明「嘉元仙洞御百首について」（『古典論叢』第11号、1982年12月）
- 蒲原義明「文保百首について」（『古典論叢』第12号、1983年6月）
- 酒井茂幸「鎌倉・南北朝期の探題歌会について」（『古典遺産』第50号、2000年8月）
- 酒井茂幸「『亀山殿七百首』伝本考」（『研究と資料』第47輯、2002年7月）
- 酒井茂幸「『亀山殿七百首』伝本考（続）」（大取一馬編『典籍と史料』龍谷大学仏教文化研究叢書、思文閣出版、2011年9月）

Ⅳ. 二条派の歌人

- 久松潜一「為世—中世和歌史の一断面—」（『東洋大学紀要』第5輯、1953年3月）
- 山西商平「二条為世—その評価をめぐって—」（『芦屋ゼミ』第1号、1973年6月）
- 土田将雄「二条派をめぐっての一考察」（『上智大学国文学論集』第9号、1976年1月）
- 金子 磁「藤原為世の生涯—その前半生について—」（『立教大学日本文学』第36号、1976年7月）
- 岡崎裕子「二条為藤年譜」（『立教大学日本文学』第61号、1988年12月）
- 井上宗雄「一条法印定為について」（『國學院雑誌』第101巻第1号、2000年1月）
→「一条法印定為」（同氏『中世歌壇と歌人伝の研究』笠間書院、2007年7月）

- 安田徳子「二条為明の生涯」(『岐阜聖徳学園大学国語国文学』第19号、2000年3月)
- 酒井茂幸「二条為世の玉津島信仰をめぐって」(『国文学研究』第134集、2001年6月)
- 酒井茂幸「二条為世年譜」(『研究と資料』第49輯、2003年7月)
- 井上宗雄「藤原為実略伝一年譜形式で一」(同氏『中世歌壇と歌人伝の研究』笠間書院、2007年7月)
- 井上宗雄「藤原盛徳(元盛法師)」(同氏『中世歌壇と歌人伝の研究』笠間書院、2007年7月)

V. 二条派の私撰集

- 富倉二郎(徳次郎)「続現葉和歌集と臨永和歌集」(『国語国文』第6巻第6号、1936年6月)
- 福田秀一「中世私撰和歌集の考察—現葉・残葉・続現葉の三集について—」(『季刊文学・語学』第15号、1960年3月)→「現葉・残葉・続現葉の三集について」(同氏『中世和歌史の研究』続篇、福田恵美子、2007年2月)
- 福田秀一「続現葉和歌集」(続群書類従完成会編『群書解題』第7巻、続群書類従完成会、1961年7月→改訂版、『群書解題』第9巻、続群書類従完成会、1986年10月)
- 福田秀一「臨永和歌集」(続群書類従完成会編『群書解題』第7巻、続群書類従完成会、1961年7月→改訂版、『群書解題』第9巻、続群書類従完成会、1986年10月)
- 福田秀一「続現葉・臨永・松花三集作者索引」(『武蔵大学人文学会雑誌』第3巻第2号、1971年10月)
- 福井 毅「中世私撰集編纂資料の歌壇史的意義」(『皇学館大学紀要』第23輯、1985年1月)
- 小川剛生「『拾遺現藻和歌集』の研究」(同氏『拾遺現藻和歌集—本文と研究—』三弥井書店、1996年5月)

VI. 後宇多の連歌

- 金子金治郎「公家連歌の隆盛」(同氏『菟玖波集の研究』風間書房、1965年12月)

VII. 『増鏡』における後宇多

- 佐藤敏彦「『増鏡』後宇多院生誕の記事について」（『日本大学文理学部研究年報』第26集、1978年2月）
- 福田景道「『増鏡』と両統問題」（『島根大学教育学部紀要 人文・社会科学』第25巻、1991年12月）
- 小島明子「『増鏡』の先例の意味－「明暗循環」説との関連－」（『国語国文』第62巻第9号、1993年9月）
- 森 茂暁「朝廷と幕府－鎌倉時代の朝幕関係と『増鏡』－」（歴史物語講座刊行委員会編『歴史物語講座』第7巻 時代と文化、風間書房、1998年8月→同氏『中世日本の政治と文化』思文閣史学叢書、思文閣出版、2006年10月）

G. 学 問・文 庫

I. 総論

- 内藤湖南「日本文化の独立」（『歴史と地理』第12巻第1号、1923年7月→同氏『日本文化史研究』弘文堂、1924年9月→『内藤湖南全集』第9巻、筑摩書房、1969年4月／『日本文化史研究』（下）、講談社学術文庫77、1976年11月）
- 龍 肅「皇室の文化事業」（同氏『鎌倉時代の研究』春秋社松柏館、1944年5月→同氏『鎌倉時代』下〔京都〕貴族政治の動向と公武の交渉、春秋社、1957年12月）

II. 後宇多の漢学教養

- 足利衍述「朝廷の儒教」（同氏『鎌倉室町時代之儒教』日本古典全集刊行会、1932年12月→復刻版、有明書房、1970年5月）
- 太田晶二郎「北畠親房卿及び南朝の漢学に関する断章」（平泉澄編『北畠親房公の研究』日本学研究所、1954年11月→増補版、皇學館大学出版部、1975年3月／『太田晶二郎著作集』第1冊 日本漢籍史を中心とする業績、

吉川弘文館、1991年8月)

田村 航「後宇多朝における御書所作文会—『勘仲記』を中心に—」(『学習院史学』第36号、1998年3月)

Ⅲ. 大覚寺統の文庫・宝蔵

田中教忠『蓮華王院三十三間御堂考』全3巻(田中忠三郎、1932年1月～3月)

池田亀鑑「蓮華王院宝蔵の什物」「蓮華王院宝蔵の興亡」(同氏『古典の批判的処置に関する研究』第1部 土佐日記原典の批判的研究、岩波書店、1941年2月)

小野則秋「朝廷の御文庫」(同氏『日本文庫史研究』上巻、大雅堂、1944年9月→復刻版、臨川書店、1980年3月)

村山修一「歴史篇 中世」(城南文化研究会編『城南—鳥羽離宮址を中心とする—』城南宮、1967年6月)→「鳥羽離宮の残映と鳥羽の村落」(同氏『修験・陰陽道と社寺史料』法蔵館、1997年1月)

竹居明男「鳥羽宝蔵納物覚書」(『国書逸文研究』第22号、1989年10月)→「鳥羽勝光明院の経蔵(宝蔵)」(同氏『日本古代仏教の文化史』吉川弘文館、1998年5月)

竹居明男「蓮華王院の宝蔵—納物・年代記・絵巻—」(古代学協会編『後白河院—動乱期の天皇—』吉川弘文館、1993年3月)→「蓮華王院の宝蔵」(同氏『日本古代仏教の文化史』吉川弘文館、1998年5月)

田島 公「中世天皇家の文庫・宝蔵の変遷—蔵書目録の紹介と収蔵品の行方—」(同氏編『東山御文庫本を中心とした禁裏本および禁裏文庫の総合的研究』平成10年度～平成12年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(2))研究成果報告書(課題番号10301015)、2001年3月→同氏編『禁裏・公家文庫研究』第2輯、思文閣出版、2006年3月)

田島 公「典籍の伝来と文庫—古代・中世の天皇家ゆかりの文庫・宝蔵を中心に—」(石上英一編『日本の時代史』第30巻 歴史と素材、吉川弘文館、2004年11月)

田島 公「天皇家ゆかりの文庫・宝蔵の「目録学的研究」の成果と課題」(『説話文学研究』第41号、2006年7月→阿部泰郎編『中世寺院の知的体系の研究—真福寺および勸修寺聖教の復原的研究—』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書(研究課題番

号 15320029)、2007年3月)

佐藤愛弓「鳥羽宝蔵と勸修寺流」(『勸修寺論輯』第5号、2009年7月)

酒井茂幸「両統迭立期の禁裏文庫と伏見宮本の成立」(同氏『禁裏本歌書の蔵書史的研究』思文閣出版、2009年11月)

(京都大学大学院博士後期課程、高野山大学密教文化研究所受託研究員)